朱舜水の困惑と安堵①

――東京都、茨城県に立てられた朱舜水記念碑を巡って――

梁　継国

要約

儒学者として水戸藩に招かれ、儒教教育に従事し、江戸時代の日本儒学界に、多大な影響を与えた朱舜水については、大いに研究されている。そうした事実も日本の文献に記録され、東京都、茨城県に立てられた朱舜水記念碑にも刻まれ、本日まで伝えられているのである。ただし、石碑に記載されている内容は通説と一致すれば問題はなかろうが、そうでなければ、その石碑の果たした影響も大きいと思う。そこで、東京都、茨城県の三箇所に立てられている朱舜水の記念碑をめぐり、朱舜水に対する評価と、朱舜水に関する評価の通説、朱舜水来日当初の目的、並びにその心情と照合して、考察してみたわけである。と同時に、そこから、来日した朱舜水の心情的な演変過程、もしくはその軌跡をも描いてみたい。

はじめに

儒学者として水戸藩に招かれ、儒教教育に従事し、江戸時代の日本儒学界に、多大な影響を与えた朱舜水については、よく知られており、大いに研究されてきたことも、ご承知の通りであると思われる。本日開催されたシンポジュームから見ても、朱舜水のその一面を評価し、特に日本の江戸時代における中国の儒家思想の伝播と研究をなされた朱舜水の貢献並びにその影響をたたえるところにその意義があると考えられる。しかし、朱舜水来日の目的から言えば、おそらくそれは不本意なことだったのではないかと私は思いたい。なぜならば、朱舜水来日の目的は、明朝復活のための助けを求めることであり、必ずしも中国の儒家思想を教授し、それを日本で広げようとしたものではないからである。結果として、その本来の目的が実現できず、琉球から水戸藩に招かれ、儒家思想の教育と研究に専念し、それを講義したりして、江戸時代の日本における儒家思想の研究と伝播に尽力し、自分でも予想外のところに大きな業績を残し、大いに評価され、日中文化交流の使者とまで讃えられてきたのである。が、本人当初の目的とは大いに異なっていたと言わざるを得ない。当然、そうした事実も日本の文献に記録され、日本各地という言い方はオーバーかもしれないが、東京都、茨

『人文コミュニケーション学科論集』11, pp. 9-16.
© 2011 茨城大学人文学部（人文学部紀要）

城県に立てられた朱舜水記念碑にも刻まれ、本日まで伝えられているのである。ただし、文献とは違い、石碑が立つとそこも名所になり、人々の目にかかるチャンスも多くなる。すると、石碑に記載されている内容は通説と一致すれば問題はなかろうが、そうでなければ、その石碑の果たした影響も大きいと思う。そこで、東京都、茨城県の三箇所に立てられている朱舜水の記念碑をめぐり、朱舜水に対する評価と、朱舜水に関する評価の通説、朱舜水来日当初の目的、並びにその心情と照合して、考察してみようとしたわけである。と同時に、そこから、来日した朱舜水の心情的な演変過程、もしくはその軌跡をも描けたら、さらなる幸いではないかとも思った。ただし、朱舜水研究の門外漢としての自分の幼稚な考えであるため、皆様方のご批判、ご叱正をいただきたい。

一. 朱舜水先生終焉之地碑

東京都文京区弥生 1-1-1東京大学農学部正門を入り警備員室後方に立てられている。昭和12年 9月 22日東京都により、旧跡と指定された。ここは本来、水戸光圀の屋敷であった。寛文八年（1668）より、亡くなる天和二年（1682）までの14年間、朱舜水がここに居住し、生活したようで、来日してから一番長くいたところといえよう。石碑の隣に次のような銘文が書かれている。

日本に亡命した中国明末の遺臣。明の万歴28年（1600）10月12日浙江省餘姚に生まれた。名は之瑜、字は楚嶼・魯璵、号は舜水。朱永祐、張肯堂、呉鍾巒について学び特に詩書に通じていた。舜水は祖国明朝の復興運動に挺身したが果たさず、万治2年（1659）七度目の長崎来訪にあたり、安東省安の懇請により日本に留まり、寛文5年（1665）小宅生順の推挙で水戸藩に招かれて東上した。同8年（1668）光圀の別荘（現在の東京大学農学部）に入り、以後の生涯をこの地に過ごした。彼の学風は、陽明学と朱子学との中間に位置する実学（実行の学）で、空論を避け、道理を重んじ、水戸光圀や安積澹泊、林鳳岡、木下順庵らに大きな影響を与えた。天和2年（1682）4月17日83歳で没し、常陸太田の瑞竜山に葬られた。死後『朱舜水先生文集』28巻が徳川光圀輯・徳川綱条校として刊行された。この記念碑は日本渡来250年祭にあたり朱舜水記念会が建てたものである。

平成2年12月 27日　再建　　東京都教育委員会

この東京都教育委員会により書かれた銘文にはまず一つ矛盾しているところがある。冒頭に「日本に亡命した中国明末の遺臣。」というように、朱舜水の身分を決めている。しかし、その朱舜水の来日した経緯については、「舜水は祖国明朝の復興運動に挺身したが果たさず、万治2年（1659）七度目の長崎来訪にあたり、安東省安の懇請により日本に留まり、寛文 5年（1665）小宅生順の推挙で水戸藩に招かれて東上した。」と記されているのである。通常、

②

亡命者といえば、政治上、宗教上などの理由で本国を脱出して、他国に逃げたものを指すが、朱舜水はそれにあたるのであろうか。朱舜水の来日した経緯に関する記述には、明らかに「長崎来訪」、「安東省安の懇請により日本に留まり」とあるものであるから、それが本当の事実であれば、その「亡命」との決め付けは不適切になるのではないかと思われる。

実際に、朱舜水の来日、及び死ぬまで日本での滞在は、いかなる原因によるものであろうか。この点については研究も盛んにされており、明らかになっているのである。特に、梁啓超編『明末朱舜水先生之瑜年譜』③と梁繩偉の「梁任公先生（朱舜水年譜）補正」④などの文献にもはっきり記述されているもので、定説ともなっているのである。贅言すれば、朱舜水の来日は亡命には当てはめられないものである。

朱舜水は、1645年から、万治 2年（1659）まで、すでに七回も長崎に来ている。その頻繁に来日した目的は、日本との貿易を通しての明王朝復活のための資金調達であった。どんな商売をしてどれほどの資金を集めたのかは不明ではあるが、この万治二年の第七回目の来日は、鄭成功を伴い、南京攻略が失敗した後のことであるのは間違いない。その失敗で、満州族支配下の清王朝（中国）には当然戻り難いから、日本に亡命したといわれても無理がないようであるが、日本人の「**懇請により日本に留ま**」ったとの記既述、および、当時日本の実情から考えれば、私は、亡命という言い方には、賛同しがたい気がする。というのは、明末清初、中国社会の不安定な政治状況より、来日して日本に長期滞在したがっている中国人が多かったのに比し、日本もまさに鎖国時代の真最中であり、中国からの亡命者はまず受け入れない状況であった。これに関して、朱舜水にも、「日本禁留唐人已四十年。」⑤ の記述がある。事実としても、朱舜水が選んだのは、亡命して政治的庇護を求めるのではなく、日本への帰化であった。つまり日本人になったわけである。この意味で、朱舜水に「**日本に亡命した中国明末の遺臣**」というレッテルを貼り付けるのは、適切であるとはいえないであろう。

さらに細かく言えば、中にある「**遺臣**」の言い方も正確さを欠いていると思う。周知の

ように、朱舜水は、六経を研究し、毛詩に精通している明末屈指の学者である。当時の明朝政府からの仕官のすすめを何回も拒否し、迷うことがなかった。官僚になって出世しょうという考えをまったく持たなかった高潔純粋な知識人であった。仕官しなかったのに、「**遺臣**」との肩書きは、彼には相応しくなかろう。

ところが、政治的欲望のない朱舜水は、なぜ、命をかけて、四方に奔走して、資金を調達し、明王朝の復活に力を惜しまずに尽力したのであろうか。深く研究はしていないが、熱血の知識人として、外来民族の侵入・支配に対する不満と憤慨によるものではなかったかと思われる。民族主義者、狭義的に言えば、愛国主義者的な行動と思いたい。反清復明が彼の精神的支柱であって、かならずしも、その成功、その目的の達成による自分の出世、または自己の政治的成功とつながっているとは限らない。

故に、朱舜水が、この「**日本に亡命した中国明末の遺臣**」と決め付けられた自分の、日本における結論的な最終評価をもし知ったら、きっと困惑するに違いない。残念ながら、水戸市にある朱舜水の銅像の裏にもほぼ近いような言い方が刻まれているのである。

二. 水戸学の基礎を築いた儒学者・朱舜水のミニ像とその碑文

この朱舜水の銅像は、茨城県水戸市北見町・ＮＴＴ東日本茨城支店前にあり、水戸市教育委員会により立てられたものである。像の裏は石碑になっているのである。その碑文は以下の通りである。

朱舜水は、明の時代に浙江省余姚に生まれる。儒学を学び将来を嘱望されたが、明朝を回復しようと長崎へ亡命し抗清復明を期した。寛文五年（一六六五）徳川光圀が小宅生順を介して舜水を賓師として江戸へ招いた。舜水の学問は空論を排して実学を尊び、その学

⑥

識は祭器・養蚕・種痘の処方に及び、なかでも、正式の儒学、釈典の礼法などを伝えて、水戸藩の教学を盛んにした功績は大きい。

平成6年3月　　水戸市教育委員会

まず、立派な儒学者ではあるが、「**抗清復明**」のため、日本に「**亡命し**」たとの記述に注目してほしい。日本に亡命したことに関しては、東京都教育委員会に立てられたものと共通している。それは既述した通り、朱舜水自身も困惑し、納得しがたいであろう。しかし、「**儒学を学び将来を嘱望された**」との言い方は、朱舜水当時の状況を如実に表現していると思われる。これは後に朱舜水の在日活動とも一貫性があり、理解されやすい。つまり、最初から立派な儒学者であるからこそ、それが水戸藩、具体的には光圀に買われ、そして活かされ、日本における朱舜水の功績として今日まで評されたのである。

しかし、碑文の後半に記述されているように、日本における朱舜水の功績は、儒学者としての純粋な儒学研究ではなく、儒学を当時の日本社会の実際状況、または実際の社会生活と結び付けて、それを教授し、実用化したところにあるのではないかと思われる。よく考えてみれば、現代社会においても、理論的研究をやっている者が、応用的、普及的な方面へ転向させられる場合、彷徨ってしまうことも免じがたいものであろう。朱舜水の内心にそういうような葛藤があったかどうかはわからないが、異国の地に生存していくためには、やむを得ないことであろう。ただし、それによって自分も評価され、尊敬されたのであるから、いささかでも安堵の境地を得られたのではないかと察せられる。

朱舜水の初来日から、在日、そして日本で死去までの三十数年間は、十七世紀の後半に当たり、江戸幕府政権が安定期に入り、鎖国政策を完成･実施していく時期であった。幕藩体制の後期になると、尊王攘夷思想が芽生え、神道と仏教を分離し、純粋に神道を崇拝するようになったのである。こういうような時代背景の下に、儒学を教えることと後代の尊王攘夷思想とは調和するものとは言えないし、幕末に出てきた西洋文明指向とはさらに矛盾したものとしかいえないであろう。そこからでも、朱舜水の日本文化の中での在日生活の複雑さの一端がうかがえると思われる。実用を重視する日本または日本人の考え方に合わせ、朱舜水は、儒家思想の純理論研究ではなく、祭器・養蚕・種痘の処方を教え、釈典の礼法などを伝えて、武士たちの教養知識を増やし、史籍の編纂を指導した。それらのことはのちに形成した水戸学には大きな影響を与え、朱舜水も当然高く評価されたのである。朱舜水にとっては、間違いなく多いに慰められたであろう。

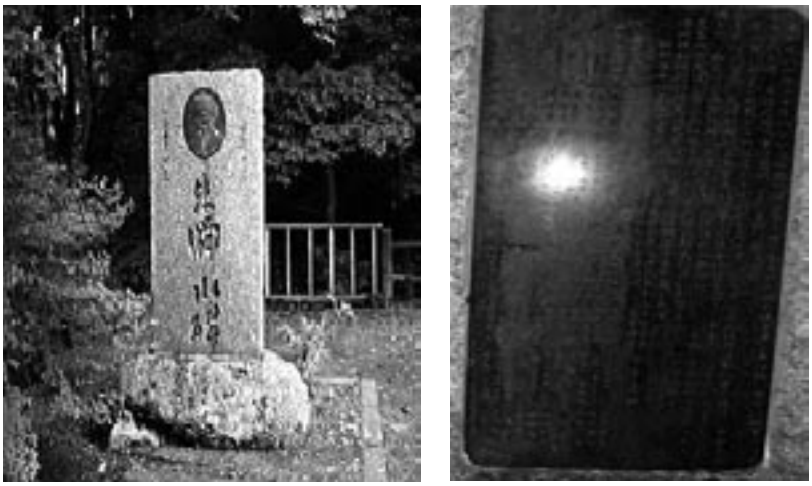
しかし、長い間、日本における朱舜水の貢献は、「徳川光圀に、易姓革命のない日本こそ中華思想の正統的な継承者だと悟らせ、‥‥‥尊王攘夷思想を誕生させたことにある」と言われている⑦ようであるが、これこそ大きな誤解だと私は言いたい。まず、ここで言っている中華思想とは、俗に言われている中華思想ではなく、儒学者としての朱舜水に身につけられている儒家思想のことだと思う。私の理解としては、儒家思想と言うのは、支配者の、被

支配者に対する制約と、被支配者の、支配者に対する制約との二つの部分によって構成されているもので、まさしく、「易姓革命」の理論的根拠になっているのである。その「易姓革命」の理論があったからこそ、今までの中国の歴史があり、儒家思想の発展と普及があったのではないかと思われる。日本、具体的には水戸藩における朱舜水の行動作用は、儒家思想、さらに大きくいえば、漢籍文化を日本人、水戸藩に伝えることであり、これによって、徳川光圀、水戸藩に尊皇攘夷の思想を誕生させることではなかったと思う。尊王攘夷思想は、当時の日本国内外の情勢、外国列強の圧力に屈しない日本人の精神等によるものであり、後の討幕運動（戦争?)、大政奉還、明治維新に直接繋がったものであるため、完全な政治的スローガンと理解しても良いものであり、純粋な儒学者としての朱舜水に代表されている儒家思想とは、性質が異なり、並べて論じることすら出来ないものである。朱舜水がもしそれを知ることが出来れば、また困惑に陥ってしまうに違いない。朱舜水に対するそういうような評価は是非訂正していただきたい。

三. 西山荘にある朱舜水碑

これは、茨城県常陸太田市新宿町590号の西山荘に立てられている石碑である。ご存じのように、西山荘というのは、朱舜水を招いてくれた水戸藩第二代目の藩主　徳川光圀(水戸黄門)が引退した後に住んでいたところである。ここに朱舜水のために石碑を建てたこと自身が非常に象徴的な意味のあることであろう。

既述した朱舜水先生終焉之地碑（東京都教育委員会建）と朱舜水のミニ像とその碑（水戸市教育委員会建）は、教育委員会とはいえ、役所によって立てられたものであるが、これに対して、この西山荘にある石碑は、朱舜水先生遺志顕彰会という民間組織により、昭和51年4月に立てられたものである。石碑の裏にある碑文は以下の通りである。



茨城県常陸太田市新宿町590号にある朱舜水碑の表と裏⑧

朱舜水（1600-82）は中国の浙江省余姚に生れた明の儒学者　朱は姓　舜水は郷里の河川からとった号　名は之瑜　字は楚璵　また魯璵　諡は文恭　十二回におよぶ明朝からの仕官のすすめにも応ぜず　ひたすら南明復興運動に身を捧げ　中国の舟山を中心に安南　長崎の間の三角貿易に従事して資金調達を図り　あるときは安南に抑留されて死を決した。鄭成功の南京攻略に従軍したが　抗清復明の夢破れ　ついに日本に永住の地をもとめられた先生の学風は　義公の知遇をうけて　水戸学の形成に深い影響を与え　江戸で永眠された

湊川神社楠氏の碑文は先生の撰　瑞龍山に明徴君子朱子墓がある

昭和五十一年四月吉日　　朱舜水先生遺志顕彰会

碑文の内容からみても分かるように、まず、「**日本に亡命した中国明末の遺臣**」（東京都教育委員会）、「**明朝を回復しようと長崎へ亡命し抗清復明を期した**」（水戸市教育委員会）のような文句の記述がない。朱舜水の来日経緯については、「**抗清復明の夢破れ　ついに日本に永住の地をもとめられた**」と客観的に述べられている。そして、「**義公の知遇をうけて　水戸学の形成に深い影響を与え　江戸で永眠された**」と具体的に何をしたかは言わず、その偉大な業績を讃えて、在日生活を簡略に記述したのである。書き方から言っても、来日までの儒学者と同時に、愛国者である朱舜水についての紹介は石碑内容の四分の三も占めており、来日した後のことは、僅か一行ぐらいである。短くはあるが、義公との親交、水戸学への深い影響などで、日本に大いに貢献した朱舜水の姿が浮き彫りされている。よく考えれば、朱舜水の日本永住は、水戸藩藩主の光圀の招きにより実現され、在日生活も水戸藩の範囲以内で送られたことであるため、水戸藩、水戸学への貢献なしには、日本への貢献も空論になってしまうのであるから、当然なことだと思われる。むしろ、「**義公の知遇をうけて**」にあるように、日本に何かをするというよりは、まず水戸藩に自分の力を尽くすべきだと朱舜水が考えたのではないかと察される。

その意味で、西山荘にあるこの朱舜水碑は、民間組織によって立てられたものの、既述した、役所によって立てられた二箇所の石碑よりも、客観的かつ正確に朱舜水を評価したもので、その記念的意義は大きいと思う。

四．終わりに

朱舜水が生きているならば、410歳になり、亡くなられてからも320年以上経っている。しかし、公に毎日人々に見られている記念石碑に刻まれている朱舜水に関する記載は、既述したとおり、不適切なところは未だ存在しているのである。出来るだけ早くその訂正をしていただきたい。

日本では、朱舜水の名はよく知られているが、古い文献や、中国でのサイト上では、どうやら朱之瑜という言い方のほうが多いようである。「**舜水者敝邑之水名也**」⑨。来日した朱舜

水が、故郷への思いを忘れないために自分でつけた号ではあるが、日本人に良く受け入れられたので、本名よりもその号が一般的によく知られ、呼ばれてきたのである。

それほど故国を愛していた朱舜水に永遠に「亡命者」、「遺臣」などのような不適切なレッテルを背負わせて良いのであろうか。少なくとも朱舜水の御霊に安堵させるべきであり、この上さらに困惑させてはいけないと私は思う。

注釈

① この論文は、2010年11月6日に、台湾大学で開催された『朱舜水與東亞文明發展國際學術研討會』に発表したものにより整理して日本語に書き直したものである。中国語繁体字版のものは、上記研討会学術論文集に収録され公表される予定である。

② 【東大散歩】
http://yanesen-urouro.bakyung.com/2006/09/post06092301.html#more
2010年7月15日取得

③ 梁啟超編『明末朱舜水先生之瑜年譜』(新編中國名人年譜集成第12 輯)、臺灣商務印書館，1981年

④ 梁繩偉「梁任公先生（朱舜水年譜）補正」《朔風》12，1939 年

⑤ 朱舜水が孫男毓仁への書簡　遼寧省図書館電子期刊閲覧室
http://lnlib.vip.qikan.com/article.aspx?titleid=gdwm20090310　2010年7月12日取得

⑥ 筆者による撮影である。

⑦ 維基百科http://zh.wikipedia.org/zh/%E6%9C%B1%E8%88%9C%E6%B0%B4 に載せている原文(2010年8月10日取得)：
朱曾参加抗清活动，也曾助郑成功北伐，南明灭亡后，不愿降清，東渡日本。於日本和德川光圀接觸，其遺臣性格與儒家思想讓德川光圀深感未有異姓革命的日本方是中華思想的正統繼承者，遂發奮編纂《大日本史》，以揚正統，導致尊王攘夷思想之催生。朱舜水更對水戸學擁有不可磨滅之影響。

⑧ 筆者による撮影である。

⑨ 朱之瑜—維基百科　2010年8月5日取得。
http://zh.wikipedia.org/zh/%E6%9C%B1%E8%88%9C%E6%B0%B4